
勇者をやっつけろ

Pinu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者をやっつける

【Nコード】

N5856I

【作者名】

P i n u

【あらすじ】

普通の高校生が突然魔王軍の重要なポジションにつくことになる。

「じゃ、勇者退治の指揮は頼みますよ。」
と魔王様はいった。理由は一切なし！

く指揮官と出会い

俺は本当にどこにでもいる普通の高校生だ。

そんな常識が壊されたのがだいたい三日前になる。

そしてその日から始まった非日常。

『どこにでもいる普通の高校生』という

日本で高校生やっている奴の8〜9割りがたが持っているだろう肩書きが

跡形もなくぶっ飛んで消えてからの日々慣れるまで二日間かかった。

それから、現実を受け入れ始めて初めて冷静さを持って話を聞いて

その理解に至ったのが昨日になる。

俺をこっちの世界に（勝手に）引き込んだ魔王様はいった。

「じゃ、勇者退治の指揮は頼みますよ。」と。

もちろん俺の返答は決まっていた。

「いやです。」

思えば俺の人生のケチのつき始めはここからだっただのかもしれない

い。

く指揮官と出会いく（後書き）

お読みいただき本当にありがとうございます。

これからもどうぞお付き合いください。

～指揮官と準備～

さて魔王様から勇者討伐の命が下った俺は早速、

勇者候補を大量生産してるというスターライト城へ向かう。

なんだかんだで結局指揮官の件を了承したのだった。

「なんか、いかにも始まりの町って感じだなあ……」

見た目はそんな感じの町だった。

勇者の情報を得るために城下町へとくりだす。

さすがに城門や町の入り口には兵士がいる。

夜中に忍び込むことも考えたが結局正面から門へと向かった。

同じ人間なんだしどうにかなるでしょ。

警戒どころか、身動きひとつされなかった。

もしかして寝てるんじゃないだろうな。

ん？……あれは……

門番の兵士の足元を面白そうに

ぶよぶよした青い物体が駆け抜けていく。

「……………」

あれは確か魔王様から貰った怪獣大図鑑の最初のページに記載されていたモンスター。

知能もないし、戦闘力もない。

あえて警戒する相手ではない、というところだろうか。

しかし、いくら弱かろうが仮にも魔物だ。

町を自由に出入り出来るってのはかなり問題だと思うぞ。

同じ人間として心の中で忠告をしておいてやった。

次にこの町の武器屋へ立ち寄っておく。

やはり、この町で主流の武器を知ることとはそのまま相手のレベル、ようするに危険度を知ることができると考えたからだ。

俺の元の世界には武器屋なんてなかったし、

店のカウンターで昼寝をかましている店主になんて声かければいいのか

わからなかったのでとりあえず

店の中で自分以外にいた唯一の客に話しかけてみる。

「最近流行の武器ってどれっすかね？いやー最近新しいのが多くて……」

台詞の内容こそ微妙だが、聞き方だけはすごく自然に聞けたと思う。

「あーこの辺は平和だからなあ。ここ10年は新作の武器は出てないよ」

その客はそんなことを平然という。さらに、

「あんた、他の国から来たのかい？まあのんびりしていけよ。道具屋はお土産が充実してるし帰りに寄っていくといいよ」

それだけ言っと店から出て行った。

俺は改めて店内を見渡してみる。

なるほど。

多分この店で一番使えそうな武器はこの銅で作られた棒くらいだろう。

よし！少しは勝機が見えてきたな。

一応俺はモンスターの指揮を任されているが

今まで生きてきた16年で、戦闘経験や戦術の教育を受けたことなど一度もない。

せいぜいが長篠の戦いでの織田軍の鉄砲三段撃ちを知っているくらいだ。

こんなことになるならもつと本をよく読んで勉強しておくべきだったぜ。

というよりこんなことになるなんて誰が想像できるのか。

しかし、えらく平和ボケした国だな。

こんな国なら俺を送り込むより上位級モンスターを送り込んだほうがよっぽど早く支配できるだろうに。

その時窓の向こう側が急に騒がしくなる。

俺は道側に面した店内の窓から外へと視線を向けたのだった。

～指揮官と戦略～

窓の外に顔を向ける。

理由は外が急に騒がしくなったこともあるが一番はある単語が聞こえたからだ。

「勇者様！」

道のあちこちからその勇者と呼ばれた人物に声がかかっている。

「え……………」

その声をかけられている人物はつい今さっきまで店内で話していた客その人だった。

勇者の情報を探りにきたつもりが自分でも気づかない間に

その張本人とまさか会話を交わすことになるうとは……

もし知っていたなら勇者のファンを装ってもっといろいろと聞けたのに。

と、同時に一つのことを思う。

えらくオーラのない勇者だったなあ、と。

俺には彼が勇者だとはまったくわからなかったよ。

勇者に先入観を持ちすぎていたのだろうか？いや、仕方ない気もする。

冴えない顔だったし、身振りだつて特に何か武道に精通してる風でもなかった。

とりあえず、深く考えることをやめ

すぐに彼が歩いていったほうに向かう。

10分くらい歩いただろうか。

周りの建物とは明らかに様子の違う建物にたどり着く。

建物の周りが全て塀に囲まれている。

門のところに表札があつたので見てみると「勇者養成学校」と書いてある。

ビンゴだ！戦略目的がこうもたやすく見つかるとは。

それにしてもわかりやすい名前だな。

しかし、ここで考えることがいくつかあることに気づく。

まず、その規模が予想より大きい。

勇者候補の集まりどころに酒場とか道場とかその程度のものを予想していたのだが

まさか学校とは……

100人くらいいるんじゃないのか？勇者の卵が。

さらに教育施設が存在している場合

その指導者達の戦力も考えなければならない。

特に学長クラスは一桁違うパラメータがデフォだと相場が

決まっている。

「うーん……」

これはもう唸るしかない。

俺はさっきまでの認識を改めなければならないかもしれない。

そしてこれが一番問題なのだが……

俺の手持ちのモンスター達のことだ。

町に向かうときに魔王様にモンスターをくれといったら

やつはこういいやがった。

「現地調達に決まってるでしょ。」

はあ？そんなの勇者のレベル上げに地味に協力するだけじゃないか。

しかし問答無用で魔法で現地送りにされた俺はそんな反論すら言えなかった。

能天気な魔王め。

力押しが使えないとなると、考えられるのは知略と戦略による搦め手。

少し考える必要がありそうだな。

俺はそのまま思考渦巻く世界に落ちていった。

く指揮官と潜入く

どのくらいそうしていただろうか。

気がつけばもう日は沈みかけており、通りを歩く人の数もまばらになっていた。

しかし……そうなるくらいにいい案が出てこない。

正攻法では魔王軍の敗北は固い。

ならば、奇襲はどうだ？

無理がある。絶対に力の差がある場合奇襲なんて

直ぐにひっくり返されるだろう。

むしろ体制を整えにくく余計不利になる可能性もある。

それなら戦線外で敵の戦力を削っていくのはどうだろう？

勇者候補達だつて町の外へ出るだろう。

少人数のところを狙いひたすら相手の戦力を削っていく。

こっちは質はともかく数には困らない。

最終的にはこっちの戦力が上回るだろう。

作戦達成は10年後くらいか？……

これかどうかと思う。この辺りのモンスターが急にそんな計画性を持ち始めれば黒幕の存在が疑われる。

俺は自分が絶対安全の下作戦を遂行したい。

指揮官の敗北イコール魔王軍の敗北だ。

うん、いつでも逃走できる状態にしておこう。

1つ決定事項ができたじゃないか。

きつと門の前で一人唸っている

少年を不審に思っただろう。

校舎の方から教師風スタイルのさわやかそうなお兄さんが走ってくる。

目が合ってしまった！逃げ出そうにも逃げ出せない。

とりあえず挨拶しておこう。

「い、こーん、こんにちは」

噛んでしまった！これは不自然すぎる。

と一人無意味に焦る。

そんな俺をみてこの教師風さわかお兄さんは苦笑しながら

「ははあゝ。お前も門限に間に合わなかったのか。」

と言ってきた。

ん？すこし展開がおかしいぞ。

「俺もこの学校の教師になってそろそろ１ヶ月たつが……

もうこれで20回目だぞ。門限破り学生の対応は。

たつく、ほんと勇者候補って時間にルーズな奴が多いよな。」

本当に多いらしい。対応が慣れきっている。

教師は本業以外でも苦勞が多いのはどこの世界でも共通なんだな。

元の世界に帰れるような事があれば毎年髪の水の後退している事で有名な

担任教師を労ってやろう、と心に誓う。

だが、そうかこいつは新任教師なのか。

なら学生の顔全部覚えてるわけではないのだろう。

すこし安心した。

それにしても勇者が時間にルーズって駄目だろ。

俺は想像する。

勇者旅立ちの日。

勇者の旅立ちを祝おうとたくさんの人々が城門に押し寄せる。

高まる歓迎ムードと

期待感。

そして勇者旅立ちを知らせる鐘になる。

その時……現れたのは！

勇者のお母さん。後ろ手に引っ張られてるのは

寝癖のまだ残る眠たげな勇者の顔。

そのまま引きずられるように門を抜け世界を救う旅へ。人々に後ろ指指されながら。

勇者だけには負けられない気持ちが高まる。

よしどうせならこのまま潜入し少し情報を探ってみるか。

俺は新任さわか教師に適当に相づちしながら

次の潜入作戦遂行のために頭をフル回転させていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5856i/>

勇者をやっつけろ

2010年10月12日04時05分発行